

ピティリム・A・ソローキン著／細川幹夫監訳
『若い愛 成熟した愛』(広池学園出版部)

永 安 幸 正

I. ソローキン・ルネッサンス

これは、読みすすんでいくにつれて、頭の芯が熱くなり、こころの中に暖かく、淨らかで、寛い境地が開けてくる本である。また同時に、今日のわれわれに、人類二千年の歴史をふまえて、東西古今にわたる人間精神の最高の到達点を展望させてくれる本である。ひとは本書から、危機における人類が、そして苦難に直面した個人が、いかにすればこの地上に平和を実現し、また一人ひとり人間としての幸福を享受しうるかについて、深い知恵と、いろいろな場合に直接役立つ具体的な指針とを、与えられるに違いない。

「将来何がおころうと、私は心の底から永遠の確信となる三つの事柄を学んだように思う。人生は、いかに苛酷なものであろうとも、この世で最も美しく、すばらしい、驚くべき宝である。神への義務を尽くすことは、人生を幸福にするもう一つの驚くべき事柄である。これが私の第二の確信である。

第三の確信は、残忍、憎悪、暴力、不正は絶対に精神的、道徳的、物質的な至福時代をつくりえないし、また将来もできないであろうということである。至福時代に向かう唯一の道は、単に説教するだけでなく、常に実践されるところの、すべてをなげうつ創造的な愛の王道しかない。」（「まえがき」より）

本書の原題は *The Ways and Power of Love* (1954) である。このタイトルは意味深長である。著者ソローキンは、ロシア革命の渦中に若い時代をほんろうされ、共産党政府によって死刑の宣告を受けながらも、辛くもレーニンのはからいで国外追放を受け生存するを得たという数奇な運命の持ち主である。上の文章は、当時の『ロシア日記』に書き記されたソローキンの胸中なのである。

ソローキンは、1930年にハーバード大学の招きを受けて社会学部の創設に加わり、晩年は「ハーバード創造的利他主義研究センター」の所長として、人間学と社会科学に新たなフロンティアを開拓した。その業績は龐大であったが、日本ではまだその全体像は紹介されていない。故タルコット・パーソンズは、ハーバード社会学におけるソローキンの後継者である。

Ⅱ. 愛の心理的、社会的科学

ソローキンは終生かけて取り組んだテーマは、世界平和の可能性をさぐり、そのために人間を非利己的にすることの必要性を立証し、そして人間が利他的に成長する三つの道を、実証的に明かにすることであった。ところで、本書の監訳者細川教授が「解説」において手際よく述べているように、ソローキンには一つの歴史観があった。すなわち、人類史は次の三つの文化の交替であるとせられるのである。

(1) 理念的文化 (ideational culture)——そこでは人々は超感覚的な実在のみを認め、限りなき精神的目的を追求する。肉体的、感覚的要素の価値は否定しようとする傾向がある。

(2) 感覚的文化 (sensate culture)——人々は、実在するものはひとり五感の感覚によってとらえられるものだけであると考え、おもに肉体的欲求の充足を目的とする。そのための方法は、人間の内なる世界の修正よりも、外なる世界の支配とつくりかえであるとする。

(3) 理想主義的文化 (idealistic culture)——理念的文化和感覚的文化とが調和的に統合された文化であって、前二者の両極的文化に対する中庸的文化である。ソローキン自身は、この型の文化を求めている。

現代は、しかしながら、この三つの文化のうち感覚的文化の支配する時代であるということが、本書の前提になっている。

歴史、社会、人間に関するソローキンの認識の根本には、すべての現象と変化が愛と憎の正負両面の要因の間の弁証法的絡み合いによって起こるといふ観念がある。そして現代の感覚的文化を超えて理想主義的文化を実現するためには、まさに愛のエネルギーの作用に頼るほかないという。それは「まえがき」に力強く表明されている。いわく、「憎悪は憎悪を引き出し、暴力は暴力を生む。」「無我の愛」は「途方もない創造力」をもつ。「愛は肉体的、精神的、道徳的な健康に必要な生命を与える。」「愛は人間を高貴にするところの、最も美しい、最も強力な教育である。」……「無限の愛の力」のみが人々の中の争いを鎮め、さし迫っている人類の撲滅を防ぐことができる。

こうしてソローキンは、まず最初に、愛というものが現れる形態を、宗教的、倫理的、存在論的、物理的、社会的な面から描写する。ここに述べられた具体的な事例は、まことに多種多様であり、それを知るだけでもこの世の「人間の生の味わい深さ」を教えられるであろう。

しかし何よりも特筆すべきことは、ソローキンのいわば「愛のエネルギー論」を樹立し展開しようとしていることである。あたかも物理の世界に物質エネルギーと力とがあるように、人間の心理社会的な世界には人間の精神と愛の作用がある。そして愛には、物財とおなじように生産、蓄積、分配のプロセスが見出されるという。愛の生産には、普通の「善き隣人たち」を生み出す方法と、特別な愛の英雄を生産する方法とがあり、それぞれの社会には

それなりの方法がそなわっている。蓄積と分配についても同様である。

そして愛は、極めて創造的な働きを秘めており、その「正のエネルギー」が十分に作用することによって、次のような著しい効果をもたらす。

- (1)愛は攻撃と憎悪をとめる。
- (2)愛は愛を生み、憎しみは憎しみを生む。
- (3)愛は健康と長命の最も重要な要素である。
- (4)愛は身心の病いを癒やす。
- (5)愛は個人の生命と精神の幸福と、道徳的、社会的な成長を決定する。
- (6)愛は個人の範囲をこえて、社会と歴史の全体に対し「創造的進歩の推進力」となる。
- (7)愛は、知識、美、善、自由、幸福という「人間生活の最高価値」の総合力に推進力を供給する。

このような愛の科学への試みは、人間個人とその集団的な歴史の理解にとって、多くの「消極的理論」の偏向を正すことになる。克服さるべき理論とは、マルクス派、フロイド派、本能主義および行動主義心理学、ダーウィニズム等であるといわれる。

Ⅲ. 人格の構造、超意識および創造性

こうして、まず人間の利他的な愛の偉大な作用に注目したならば、次はその作用を生み出す人間の性質、人格のしくみを立ち入って明かにしなくてはならない。つまり、人間を創造的、利他的に形成する上で有効な方法を見つけるには、「人格の心的構造」と「人体に発し人体を通して作用するエネルギー」に関する理論が求められるのである。それは本書の第二部「人間の心の構造とエネルギー」で明かにされている。

ソローキンの理論的主張は、ことに現在支配的な理論の一つであるフロイド、E・フォン・ハルトマン等の学説に対する鋭い批判のうえに成り立っている。なかでも特に、ソローキンの「超意識」論は重要である。このことはまさに現在十分に評価されるべきである。

フロイド等の欠陥を、ソローキンは三つあげている。

(1)無意識ないし潜在意識の中に、二つの大きく異なる人間エネルギーを混同して入れている。つまり、心の意識的、合理的レベル以下にある生物的無意識と、そのレベル以上にある超意識との混同である。深層心理学は、人間エネルギーの「最も低級な形態」をみているが、「人間の最も高級な超意識的天才」には盲目であり、崇高な、創造的、利他的傾向を見のがしている。

(2)意識と無意識のエネルギーを単純化しすぎている。

(3)個人の心的構造およびエネルギーと、その個人が生活している集団や文化の構造およびエネルギーとの関係を曖昧にしかとらえていない。

それゆえソローキンは、既存の深層心理学にかえて、次の四つからなる独自の「四重の理論」を唱える。

(1)生物的な無意識(潜在意識)——生物的な欲求、衝動、エネルギー、活動。

(2)生物的な意識——人間の生物的緊張が意識の分野に入るときに現れる。

「ノドが乾いた」、「疲れた」など。

(3)社会文化的な意識——自分が関係している社会文化的集団に対応する自我、役割、活動にともなうもの。家族、職業、宗教、国家、人種などの意識がある。

(4)超意識——人間における神的なもの、最高度の創造的天才などと呼ばれるもの。

この最高の次元における超意識については、社会科学や人文科学では十分に承認されていないが、超意識の存在することは確実である。ソローキンは、特に第六章「人間の心の構造、創造性、認識における超意識」において、この超意識の現れの特質と実例を詳しく論じている。ソローキンは、超意識の数学、科学的研究、哲学、宗教、倫理学等々における実例を考察している。超意識は、科学、芸術、宗教、法、経済、政治その他、人間の創造的活動のあらゆる分野においてその根源となっているのである。この超意識は古来、いろいろな名称で呼ばれてきたものである。いわく、普遍、大我、神我、

覚り、天理、氣、ヌース、神の知恵と恩寵、啓示、 pneuma、靈、創造性、英知、無意識……等々。

次に大切な事は、ソローキンが、超意識を頂点とし生物的無意識を基底とする人格全構造の調和的統合を強調し、人間の利他的成長と創造性を発達させるための「三重の手術」について語っていることである。

人格発達の理想は、最も高潔で、最高に統合のとれた「創造的天才」である。それは、次のような特徴をもっている。

- (1)超意識が十分に発達し、最も偉大な創造性の域に達している。
- (2)個人の人格に関与するさまざまな社会文化的自我が互いに調和し、「内的な葛藤のない統合的な文化体系」をもつ。
- (3)あらゆる生物意識的な自我とエネルギーが調和している。
- (4)意識と超意識によって無意識のエネルギーが統制され、統合されている。

ひとはこのようなソローキンの見方が、あたかもプラトンの三層構造の人格理論を想起させることに気づかれるであろう。

ここからソローキンの極めて興味深い「三重の手術」が提案される。それは、

- (i)個人の人格構造への手術——超意識の最大限の開発。
- (ii)文化的価値の全体への手術——中心的価値としての創造的愛という最高価値の開発。
- (iii)社会的集団と制度つまり社会構造への手術——利他的、創造的集団の再建、創造、利他的集団への加入。

という三つの位相にわたる同時的な変換である。

Ⅳ. 人類の利他的成長への道

こうしてソローキンの研究は、第三部に入る。実践的にはこの部分が、本書の中で最も興味深いところである。すなわち、まず、人類史における「最高の愛」を開発するためには「超意識」の開与が必要であり、その超意識を

目ざめさせるための「自我超越の技法」がなければならない。ソローキンは、洋の東西を問わず、偉大な利他主義者たちの実際の証言をたくさん集めている。仏陀、イエス、ガンディー、シュヴァイツァーその他、卓越した愛の使徒たちの「異口同音」の証言は、まことに強く深く心に響くものがある。

最高の利他主義者たちの第一の共通点は、神、天、道、ブラフマン、仁、ロゴス、内なる光など「さまざまな名前と呼ばれる超意識」の「単なる手段」としてみずから行動したことである。聖テレサの言葉にいう。「この善い行ないはすべて〈神のものであり〉私のものではない。」神がわたくしたちを通してそれを行なっているのである。ガンディーは、祈り、精神集中、自己放棄、謙遜によって活性化された超意識の恵みを説いている。そのほか、「自己をすてること」、「神を愛すること」、「魂を空にすること」、「穏やかな黙想と無為」、ヨーガや禅の行などの意味を、ソローキンは指摘している。また、ギリシャ・ローマの古典哲学、コメニウス、フレーベル、トルストイなどにも言及されている。

卓越した利他主義者たちが行なった技法にも光をあてるべきである。それは、超意識に対する祈り、全文明からの孤立、不断の冥想と精神集中、禁欲的修行、等々である。

こうした研究において、ソローキンの着眼の特筆すべき点は、卓越した利他主義者に三つのタイプが存在し、それに対応して利他的成長に三つの経路があるということである。

その三つの型とは、次のものである。

- (1)早期幸運型利他主義者——非常に若い頃から、異変や危機に出くわすことなくすんなりと、時とともに利他的に成長してゆく人々。シュヴァイツァー、ウールマン、フランクリンなどがこの型に属する。
- (2)後期熟成（激変）型利他主義者——人生のある時期に苦しい困難な過程を通して、人格の分裂を再統合し、人格の根本的再造、改心、更生を果たす人々。釈迦、聖パウロ、聖アウグスティヌスなどが典型的な人であ

る。

(3)中間型利他主義者——早期型と後期型の双方の特徴を穏やかな形でもっている人々。

第九章において、ソローキンが行なっているこの三つの型の人々の全人格の改造に関する集中的描写は、読む者の魂をして震蕩させるものがある。

早期幸運型の人々の利他的成長の技法は「名人芸」であって、そこには波風の立たない静かな気づきと成長がうかがわれる（シュヴァイツァーについての記述を参照）。それでは、この型の利他主義者の成長を決定づけるものは何であろうか。ソローキンは、早期型の人々が「幸運な玉手箱」をいかにして恵まれるかに関するさまざまな説を検討している。そのうち、神の恩寵、靈性遺伝、生まれと星座や星の影響、胎児期におけるエングラムを重視するダイアネティクスなどは、「立証不可能な理論」だとしている。

それにかわって、検証可能な要因としてソローキンが最も重視するのは、家族の機能の中に「幸運の玉手箱」を見出す考え方である。彼は、孔子の「考行はあらゆる徳の根本である」という教えを引いている。家族については、(1)特に夫と妻との間の子供への決定的影響、(2)家族員の高い価値がみなぎり、実践されていることの大切さ、という二つの命題が力説されている（第11章）。家族は、人間に対する愛の最も強い産出の場である。新生児の時から創造的利他主義者に育てられることが肝要なのである。ソローキンの家族の分析は、示唆するところが非常に大きい。

他方、後期型の利他的成長についてはどうか。ソローキンは、釈迦や聖フランシスなどの改心の経路を描写しているが、改心以前に人格の混乱や分裂、不安定と苦痛の先行することが共通の特徴であるとされている。そして、利他的寛容への促進要因としては、老いた人、病人、死人などとの「出会い」が重要である。『レ・ミゼラブル』におけるように「予期せぬ親切」、あるいは絶えざる好意もまた、決定的な促進要因となりうる。他方では、破局、苦悩、欲求不満も転回をうながす。「苦悩を通して知は来る」（アイスキェロス）ともいう。しかし、負の経験は、利他的成長よりも、道徳的墮落

を生み出すことが多いとソローキンは述べている。

ここで特筆すべきことは、第12章に述べられているが、「分極化の法則」である。これは、個人でも文化でも集団でも同じく、危機や災難や欲求不満が、陰に隠れた矛盾を表に明かにするということである。この分裂と矛盾は、どちらの傾向が強いかによって、利他的に成長するか（陽性の分極化）、あるいは道徳的に墮落するか（陰性の分極化）となるのである。そこで、問題は、陽性の分極化にすすむようにするにはいかにすればよいかである。それが促進要因の意義である。この分極化への着眼は、危機、非常時、聖なる時において、物事の隠れた本質が現れるという今日の「聖俗理論」とつながる見方である。

さらにソローキンは、以上のような人格の改造と共に、自己をとりまく所属集団（加入）の再編成を行わなければならないことを教えている。それには次の四つの方法がある。

(1)隠者的孤立。

(2)利他的な巡礼の旅。

(3)僧院や僧団など特別な集団や環境の設立。

(4)現実社会にとどまり、利他的成長を促進する集団や環境のみを選択すること。

はじめの二つは、特別に強靱な魂をもった少数者にとってのみ可能であり、第三の方法は比較的小さな割合を占めるだけである。大多数の人々に受け入れられるのは、第四の方法である。いずれにしても、このような集団加入の再編成は時間がかり、苦痛をともなう過程であり、困難な手術であるといわれる。

本書におけるソローキンの試みは、主題の重大さと研究の困難さにもかかわらず、まことに「もう一つのルネッサンス」と呼ぶにふさわしい全人類の意味をもっている。それは、人間個人と集団とをともに視野に入れ、かつまた人間とその歴史を動かす愛と憎という正負二つの要因を正視し、それによっ

て人類進化の道を探ろうとする壮大な努力であるといえる。しかもそれは、世にありがちな精神主義や空論や独善に陥らず、着実な実証的精神と、地球上のすべての異文化に目を広げていこうとする寛大なる方法的態度とに支えられている。本訳書を機会に、ソーキンの遺志がもっと多くの人々に受け継がれて新たな研究の気運が盛り上がることを念願する。このように困難な訳業に全身全霊を捧げられた訳者に、心からなる敬意を表したい。